

K3-70 前置胎盤の母体背景・超音波所見の多変量解析による帝王切開時の多量出血と癒着胎盤の予測に関する検討

昭和大学

東 美和, 長谷川潤一, 松岡 隆, 三村貴志, 仲村将光, 市塚清健, 関沢明彦, 岡井 崇

【目的】前置胎盤症例の母体背景と帝王切開前の超音波所見によって、手術時の多量出血及び癒着胎盤の診断リスク評価が可能かどうかを検討する目的で以下の研究を行った。【方法】平成12～20年に当院で分娩した前置胎盤116例を対象とし、分娩時多量出血(2500ml以上)及び癒着胎盤のリスク因子として、35歳以上、経産、既往帝王切開、分娩直前の超音波検査による以下の所見：前置胎盤付着、前回帝切創部胎盤付着、内子宮口からそれを覆う胎盤辺縁までの最短距離が2cm以上、Placenta Lacunae(胎盤実質の1cm上の不整なcystic area)、clear zoneの消失(胎盤と筋層の間のlow echoicな線状エコーの消失)、子宮頸管筋層のsponge like echo(5mm大5個以上のcystic area)、辺縁静脈洞の怒脹(胎盤辺縁で怒脹した著明な血流)、頸管長25mm未満、を多変量解析により検討した。【成績】(1)多量出血に関連するとして抽出された因子と、そのオッズ比(95%信頼区間)は、35歳以上4.1(1.2-13.7)、前壁付着6.0(1.2-30.3)、sponge like echo 4.4(1.3-15.0)、頸管長25mm未満14.6(3.5-61.4)であった。(2)癒着胎盤との関連では、clear zoneの消失所見が抽出され、オッズ比は37.8(2.4-588.9)であった。【結論】前置胎盤において、帝切時の多量出血や癒着胎盤を予測することは重要で、本研究結果は術前準備や、患者への説明に有用であると考えられた。

K3-71 産褥期血腫の治療について一動脈塞栓術を施行した10症例から得られた教訓—沖縄県立中部病院総合周産期母子医療センター¹, 沖縄県立宮古病院²橋口幹夫¹, 金城国仁¹, 市来絵美¹, 尾身牧子¹, 竹谷 朱¹, 奥平忠寛², 仲本 剛¹, 浜田一志¹, 三浦耕子¹, 井上 格¹, 徳嶺辰彦¹, 高橋慶行¹

【目的】経産分娩後に発症する外陰、腔壁血腫は比較的、稀な合併症である。時として重篤な場合があり、その治療に苦慮することがある。今回、当院で経験した症例を検討し報告する。【方法】1998年1月から2008年7月までに経験した症例の診療録を後方視的に検討した。【成績】血腫の発生部位は、尿生殖隔膜を境に、その下方に発生する外陰血腫、外陰部と坐骨直腸窩に発生する外陰・腔壁血腫、上方の腔壁組織にできる腔壁血腫、さらに上方へ進展・波及する後腹膜血腫の4カ所に分類した。外陰血腫が16例、外陰・腔壁血腫が9例、腔壁血腫が13例、後腹膜血腫が2例の合計40症例であった。合併症で特徴的なものは、Ehlers-Danlos症候群が2症例あった。腔壁血腫や後腹膜血腫では、患者の訴えが乏しく、ショックバイタルで初めて異常に気付く症例があった。超音波、骨盤CTは、診断のみならず経時的な血腫の評価にも用いられていた。治療は、外陰血腫の症例は、圧迫や切開、結紮が有効であった。外陰・腔壁血腫、腔壁血腫、後腹膜血腫において10例、動脈塞栓術が必要であった。特に腔壁血腫の13例中7例(53%)で動脈塞栓術が必要であった。腔壁血腫7例中5例(71%)は、外科的治療が不成功な症例に動脈塞栓術を施行した。【結論】腔壁血腫は、外陰血腫と異なり、責任血管の同定、結紮止血が困難であり、また解剖学的に血腫増大が起こりやすく重篤になりやすい。そのため、腔壁血腫の半数が動脈塞栓術を必要とし、また動脈塞栓術適応例の7割において初期外科治療が不成功であった。今後の治療方針として腔壁血腫は、圧迫止血で効果が得られない場合、切開、結紮止血を行わずに速やかに動脈塞栓術を適応とする結論に達した。

5
日
目
高
得
点
演
題**K3-72** 尿中コチニンを用いた妊婦の喫煙状況の縦断調査と喫煙防止

大阪大保健学科

大橋一友

【目的】妊婦自身の喫煙の申告には虚偽が多く、自己申告だけでは喫煙状況の評価は困難である。さらに受動喫煙も妊婦の喫煙として考慮する必要がある。本研究では妊婦尿中コチニン測定を併用した喫煙状況の評価と、検査結果を妊婦と家族に伝えることによる喫煙防止効果の評価を行った。【方法】平成19年9月より平成20年6月まで、5つの産科医院にて縦断調査を行った。妊娠前期、中期、末期の3回の妊婦検診時に質問票に回答してもらい、尿中コチニン測定をNicCheck試験紙で行った。検査結果は次回健診時に報告書を妊婦に手渡すと同時に、母子健康手帳に記入した。本研究は研究者所属大学の倫理委員会の承認を受け、全調査対象者から文書での同意を得ている。【成績】対象者1115名の登録時期は初期が582名、中期が325名、末期が208名であり、自己申告による喫煙者は48名(8.2%)、42名(12.9%)、16名(7.7%)であった。一方、尿中コチニン陽性者は203名(34.9%)、98名(30.2%)、70名(33.7%)であった。妊娠初期・中期に登録し、妊娠末期まで追跡可能であった305名について登録時と妊娠末期の喫煙状況を比較した。自己申告による喫煙者は35名(11.5%)から40名(13.1%)に増加していたが、尿中コチニン陽性妊婦は94名(30.8%)から81名(26.6%)に減少していた。【結論】自己申告での喫煙者の2倍以上の尿中コチニン陽性者が存在した。尿中コチニンによってタバコの煙の暴露状況を妊婦本人や家族に周知させることにより、尿中コチニン陽性者率は減少した。今後、妊婦の喫煙評価には尿中コチニンを指標とする必要があり、尿中コチニン測定は喫煙防止にも有用である。